

生徒の皆さん、第44回旭城祭お疲れさまでした。今年の旭城祭は、新型コロナウイルス感染症の防止対策を講じて実施した「特別な学校祭」でした。2学期の始業式の式辞で、来校者に「ここまでやってくれているなら安心だ」と思っていただけるよう、知恵を絞り、準備を尽くしてほしい、と話したことを覚えているでしょうか。また、開祭式では、保護者の皆さんが安心して楽しめるよう、細心の注意を払って、おもてなしをしてください、とお話ししました。

皆さんは、これらのことを完璧にやり切ってくれました。来校した保護者は合計785名に上りましたが、何人もの保護者から「生徒たちは本当によくやっていますね。」とお褒めの言葉をいただきました。

今回の旭城祭のテーマである「祭生」の通り、祭からあふれ出る生命力や生きる希望を随所で感じる事が出来ました。そして、「思い出が密です」のキャッチフレーズのように、人生最高の思い出に残る旭城祭となった人も多かったのではないのでしょうか。

さて、本題である講評ですが、一言でいうと、「全体にコンパクトではあったが、質は高かった」と思いました。

まず、開祭式ですが、高校の実行委員長の熊倉君と深津君との掛け合いによる開祭宣言は秀逸でした。ミルクボーイのネタをうまく使って、旭城祭の本質を突いた名言の数々には感動させられました。お陰で、気負うことなく自然体でやればいいんだと、余分な肩の力が抜けました。本当に素晴らしかったです。

続いて上映された各クラスのCMも趣向が凝らされており、見ごたえがありました。特に、先生方の出演シーンには新たな発見がありました。

吹奏楽部の演奏は、本来なら夏の大会で演奏するはずでしたが、それはかなわず、今回の発表に向けて全力で取り組んできました。その成果をいかに発揮してくれました。お見事でした。

続いて、各クラスや参加団体について、具体的に講評します。

中学1年生は、「SDG z 研究発表会」でした。関連するテーマごとにクラス横断でチームになり、パワーポイントを使って発表していました。同じテーマでも発表者ごとに視点が違うので、それらを知ることで、多くの気づきや学びがあったのではないかと思います。

2年生は、「見たい、知りたい、考えたい 職業の世界」でした。私が聞いた発表は、自衛官についてでしたが、ネットで調べただけでなく、知り合いにインタビューするなど、より身近なものに感じられるよう、工夫が感じられました。

3年生は、「シンカゼミ中間発表会」でした。さすがに1, 2年生とは異なり、研究テーマを設定し、リサーチクエスチョンや仮説をたて、フィールドワークを行った結果を発表していました。何組かの発表を聞きましたが、例えば、アメリカザリガニの研究では、実際に捕獲した数をデータで示したり、調理して食べてみると、楽しみながら研究している様子が伝わってきました。今後は楽しみだなあと感じました。

なお、各学年とも、コロナ対策は万全でした。

次に高校生の発表についてです。

1年生は、1組の「久保田屋 昭和タウン」は、自分たちが体験していない昭和をクリエイティブに再現することに成功していました。懐かしい雰囲気を楽しめました。

2組の「名探偵武田アメリカ事件簿」は、映像を使った謎解きがメインでしたが、装飾のセンスが良かったことが印象に残りました。

3組の「栃木ガールズコレクション」はあまりの人気で、会場に入ることが出来ませんでした。見学できた教頭先生からは、とても素晴らしかったと聞いています。私も見たかったです。

4組のつまようじアート、10万本のつまようじを使ったアートは圧巻でした。ピタゴラスイッチもよくできていました。よく頑張りました。

2年生は、1組の「テレビ旭」私はふらっと入りましたが、なんとなく見入ってしまい、気が付くと最後まで見てしまいました。さりげないアイデアが光りました。

2組の「Sano Disney Studio」、親しみやすいゲームと黒板アートというバランスが良かったです。全体的に、室内の装飾のセンスの良さが群を抜いていました。

3組の「VS 嵐 in 2-3」では、アトラクション系のゲームで楽しめるよう工夫されていました。会場を大きく使い、見た目で楽しそうな雰囲気をつくり出していました。

4組は、モルックというスポーツを実際に体験するだけでなく、ゲームで楽しんでもらえるよう工夫していました。新しい風を感じました。素晴らしかったです。

高校3年生は、いずれも食品販売でしたが、販売する場所と食堂がセットになっており、いずれもコロナ対策が万全でした。クラスによって、食堂でのハイグレードな黒板アートやトトロの森、木のオブジェなど、目でも楽しんでもらえるような工夫を凝らしており、安心して食事を楽しんでもいただけるような雰囲気作りに、おもてなしの心を感じました。さすがは3年生だなと思いました。

次に、各部活動の発表や展示についてですが、

中高の吹奏楽部による合同演奏会は客席が満員の大盛況で、熱のこもった演奏を聞かせてくれました。顧問の小林先生からは、効率よく質の高い練習を目指してきた、と聞いています。生徒たちからは、「やり切った」という思いが伝わってきました。

美術部も中高の合同発表会でした。同じ段ボールを素材にして、それぞれが自由に表現しているところが、芸術っていいなあと思

わせてくれました。また、コンピュータを使った GIF アニメなど、新しい分野に挑戦していました。巨大壁画も素晴らしかったです。確かに、今までとは違う、と感じました。

科学部は、恒例の水族館や先輩たちの研究の成果の展示に加え、カメの解剖が人気を集めていました。カメの解剖は、代々、部長が行うことになっており、今年は2年生の戸室さんがその大役を務めました。

手芸部は中高それぞれエコバック等を制作販売していました。私もエコバックを購入しましたが、非常にセンスのいい出来栄えにびっくりしました。

ラグビー部は、足利大学付属高校との招待試合が行われました。7人制、7分ハーフで1試合行いました。2階の窓から見ていましたが、何対何かわからないほど、本校が快勝したそうです。

野球部は、9月6日（日）に、佐野高校と足利清風高校の連合チームが、宇都宮東高校と壬生高校の連合チーム、矢板東高校との招待試合を行う予定です。これが終わって、本当の意味で旭城祭の終了となります。

軽音楽部は、コロナ対策で整然とした中でも、大いに盛り上がっていました。顧問である島田先生の華麗なギター演奏も注目の的でした。

天文同好会は、例年のような大がかりなプラネタリウムは密になってしまうため実施できませんでしたが、星座のパネル展示やビンゴ大会で盛り上げていました。

パソコン同好会は、ゲームの画面を録画して編集した作品を発表しました。技術的にも高度なものがあり、人気を集めていました。

進路委員会は、「生井塾」として、白板で大学入試問題をひたすら解く、そしてそれに喜びを感じる、というシンプルな活動が新鮮でした。佐高も進学校として、新たなステージに入ってきたことを実感させられました。

SGH クラブのディベート班、研究班、それぞれ、普段の活動の様子を工夫して伝えていました。ディベート班では、英語でのディベートを理解してもらうために、「自分の役割はこんな仕事をします」「自分は今英語でこんなことを言いました」と日本語で解説を入れていました。より多くの人に、ディベートの魅力を伝えることに成功していました。研究班では、国内班、海外班、フランス語班、それぞれが作成したポスターの完成度が半端なく高いことに心底、驚きました。

どの活動も趣向を凝らし、クラスや参加団体が一丸となって、「みんなで盛り上げよう」という意気込みが伝わってきた素晴らしいものでした。ポジティブな熱い思いが集まることで、いかに大きなパワーが生まれるかを改めて体感できたことと思います。そして、多くの皆さんが感動を共有できたことと思います。

後夜祭は、まさに生命力の爆発で、参加した高校生の生き生きとした姿が目には焼き付きました。

さて、最後に、全体の企画・運営に携わった旭城祭実行委員および生徒会役員についてですが、そもそも、彼らが、コロナ対策をした上での旭城祭を企画してくれなかったら、実施することはなかったでしょう。また、ただ企画するだけでなく、実際に先頭に立って動くことによって、周りをどんどん巻き込んでいき、みんなが旭城祭を成功させようという気持ちを高めてくれていました。

彼らは、どんなささいなことでも、決して手を抜きませんでした。例えば、トイレのドアの取っ手や水道の蛇口など、多くの人

が触れる場所の消毒を、隅々まで黙々とこなしていました。それが、お客様である保護者の皆さんに、大きな安心感をもたらしていたことは、言うまでもありません。本当に、よくやってくれました。お疲れさまでした。

旭城祭運営の中心として頑張った、高校の熊倉委員長、中学の若林委員長をはじめとする、実行委員の皆さん、そして最後の大仕事だった齋藤会長を中心とする高校生徒会の皆さん、亀田会長を中心とする中学生徒会の皆さん、本当にお疲れ様でした。

来年度は、どのような形で開催することになるかはわかりませんが、この体験や得られたノウハウを生かして、来年、再来年と更に素晴らしい旭城祭となることを期待しています。

さて、高校3年生はいよいよ本格的な受験シーズンを迎えます。旭城祭で見せてくれたパワーを受験に向ければ嬉しい春を迎えることができるはずです。学力も受験のテクニックも重要ですが、何より大切なのは、自分を更なる高みに押し上げようとする強い意志です。それを皆さんは、これまでの高校生活や今回の旭城祭で培ってきたはずです。自信を持って、全力で頑張ってください。

以上で、講評を終わりにします。